地球物理学教室の近況　　里村雄彦教授　地球惑星科学専攻長（S51/①）

昔は教室主任、今の言葉では「専攻長」と呼びますが里村です。今年度の状況ですが、組織そのものは変わっていません。地球惑星科学専攻に地球物理学と地質学鉱物学の 2 教室があって、地球物理学教室は大講座の固体地球物理学講座、水圏地球物理学講座、大気圏物理学講座および太陽惑星系電磁気学講座で構成されています。その下に測地学、地震学などの研究室が並んでいます。今年は地球物理学分野の教室主任が専攻長となって、地質鉱物学分野の教室主任が副専攻長、これは毎年交替します。それに上賀茂地学観測所と附属地磁気世界資料解析センターがあります。大学院も去年と同じ分科です。今年度、大学院は専攻長であり里村が務めています。現在、地球物理学教室には 18 名の教員が所属しており、測地学研究室は福田さん、地震学は平原さん、中西さんおよび久家さん、活構造は堤さんです。宮崎真一準教授は大講座の準教授として着任したがどこかの講座に属するわけではありません。海洋は淡路さん、大気は余田さん、物理は里村の担当です。　大気圏物理学の準教授は現在選考中です。太陽は町田さん、斉藤さんです。事務室は主任の吉田さん、再雇用の金田さん、時間雇用の銭谷さん、青島さん、淵上さん、技術職員の高畑さん、労務用務補佐員が毛利さんです。地磁気センターが家森さん、山本さんは出張中です。火山研究センターは鍵山さん、大倉さんです。人事の変遷については、3 月末で許斐さんが、4 月末には東さんが退職の予定です。

主な行事は、5 月に引越し、8 月 8 日にオープン・キャンパスを高校生対象として実施します。昨年 11 月 7 日にはオープン・ラボを行い、授業の一部として研究（室）を紹介しました。学部定員は 29 名ですが充足は難しく、高校での地学受講が皆無に近いことに起因します。12 月初めには輻合部を立ち上げますが専攻内の組織で、hub の意味です。地学関係は 4 号館、2 号館から全研究室が 1 号館に移り、１階から５階までを占めます。引越し予定の 5 月以降はどうぞ１号館へお出でください。Global COC 的な提案は採択されませんでしたが、輻合部でがんばってやろうとしています。１１月に発足し１２月に発足シンポジウムを開催して活動を始めており、地球惑星科学専攻、地質鉱物と共同してもう一歩先の分野横断型の共同研究を目指します。また気象と海洋、固体地物と地質などを企画提案するような学際的な活動を展開します。大学院教育（セミナー）を民間企業の人を呼ぶとか、国際ワークショップなどを開催します。教科書の編纂・出版も計画しています。大型重点研究としては気候変遷と沈み込み帯を中心課題とし、２１世紀 COE で展開した海外サテライト・オフィスを活用して進めます。新分野への企画としての気候変遷はボーリング・コアを調べて新しいプロジェクトを提案し、文科省などへ要求していきます。

最後になりましたが学事に関連しては、学部定員が 19 から 29 名に増えたことにより昨年から課題演習を一新し、とくに後期は教員毎に課題を提案し学生を積極的に参加させることにしました。昨年６月には修士課程の説明会を開催し、８月に入学試験を行いました。修士の入学定員は４２名で、３９名を合格としました。定員については 10 名程度の削減という方向で研究科レベルの検討がなされています。学生の進路ですが卒業予定者は 19 名です。本学大学院への進学が 14 名、他大学 2 名、就職 3 名です。修士卒業生 38 名のうち 11 名が就職、気象庁 4 名、財団 1 名、民間企業 19 名、未定が５名です。博士課程 11 名の進路はポスドクなど研究者が６名、民間企業が 2 名、未定が 3 名です。耐震工事関係では３月１３日に引渡しがあり、地球惑星関係は全て 1 号館に集結して、輻合部により活動を強化します。教室間の連携をか一層強化していきます。学

部生 29 名の確保も大変であり、来年度は課題研究も新しいタイプに変えて学生を募集していくことになっております。大学院の定員見直しも重要な問題であります。教員定員 21 名も 19 名が運用可能でありますが、減る可能性もあります。したがって大学院を出ても落ち着いて研究が出来る職に就けることが困難な状況が一層ひどくなると思われます。同窓会の皆様にも今後いろいろご支援を給わりたいと思います。有難うございました。